

慶北大學校国際シンポジウム参加記

曹 起虎*

韓国の慶北大學校嶺南文化研究院創立10周年記念人文韓国(HK)国際學術シンポジウムが、2010年7月1日(木)から4日(日)までの4日間にわたって、大邱広域市のブルゴ(불교, Burgo)ホテルと慶州市で開催された。当シンポジウムは、韓国研究財団(National Research Foundation of Korea)の後援を受け、「東アジア、横断する生活史(Material Culture and Everyday Life in East Asia) —物質文化と日常生活、その歴史的展開—」というタイトルで開かれた。このシンポジウムでは、イギリス・フランス・日本・中国、そして韓国の歴史・民俗学者総勢23人が6つのセッション(Session)を通して発表を行った。

このうち、日本人は、神奈川大学大学院教授、日本常民文化研究所長である佐野賢治、田崎哲

郎(愛知大学名誉教授)・久留島典子(東京大学史料編纂所画像史料解析センター長)の3人が講演および発表を行った。

このシンポジウムでは、イギリスのフランシスカ・ブレイ(Francesca Bray; Edinburgh University)氏の基調講演が行われ、それに引き続いて各テーマによる発表が行われた。会議の内容は“Material Culture and Everyday Life in East Asia”と題し、B6判636頁の報告書としてまとめられた。

国際學術シンポジウムを主催する慶北大學校嶺南文化研究院創立10周年記念人文韓国(HK)側は、7月2日の夜、祝賀宴を開き、韓国の伝統的な舞踊・楽器演奏などの催し物で参加者を慰労、7月3日の会終了後、慶州の国立博物館、最終日7月4日には、韓国の「儒教の村」(慶州の北の方面にある良洞(ヤンドン)マウル; 世界文化遺産)を見学会を用意、参加者の韓国理解に努めた。今回の国際學術シンポジウムをきっかけとして慶北大學校嶺南文化研究院の益々の発展を心より祈るものである。



※神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科博士後期課程

周 永河 (ジュ・ヨンハ) 著
『飲食の人文学—食べ物で見た韓国の歴史と文化』

韓国学中央研究院教授の周永河 (ジュ・ウヨンハ) は『キムチの文化人類学的研究』をはじめ、韓国の民俗学界では継続的に食生活、食文化について深く研究してきた研究者である。今回出版された本は『飲食の人文学』というタイトルである。この本の意図はタイトルからも分かるように、飲食 (韓国では食べ物と飲み物を含めて「飲食」) に関する従来からの研究が主に理科系の家庭学を中心としてきたが、「飲食」を生活、文化、歴史の視点から眺める人文学的な観点が必要であることを主張している。また「飲食学」という新しい学問定立の可能性を打診している本書では、序説の「人文科学の目線で捉える飲食学」と、本論の食べ物に対する見方、補論としての「韓国飲食の歴史と文化の研究史50年」が収録されている。本書の目次は以下の通りである。

序説 | 人文の目線で捉える飲食学

第1部 今日韓国飲食を見る

第1章 食口論

第2章 期待と現実との乖離、韓流と韓国料理

第3章 韓国料理の辛さはどのように進化したか

第4章 ビビンバの進化と言説(談論)の研究

第2部 韓国料理、そして近代

第5章 食卓上の近代

第6章 酒幕 (ジュマク) の近代

第7章 魚の消費と近代

第8章 他者化された朝鮮料理

第9章 韓国の食べ物とは何か

第3部 韓国料理、古いものとの出会い

第10章 道具の想似点と文化の相違点

第11章 食文化に現れる儒教的な秩序と日常化

第12章 供物、人間と神のつながり

第13章 想像の中の朝鮮料理

補論 | 韓国料理の歴史と文化の研究史50年

序説で、彼は「飲食」という対象を捕えるための様々な方法を記述し、「飲食」の文化的なアプローチの必要性に言及している。このために「ヒストリカル・レシピ (historical recipe、歴史上の調理法)」を研究テーマにするべきであると主張する。つまり、ある特定の「飲食」の歴史を探るために、ヒストリカル・レシピの記録を通じて、その物質的な特性を把握しなければならないということである。また韓国の民俗学界や歴史学界では、比較的研究されていない「飲食」について歴史学、文化人類学、民俗学などの様々な学問の観点から眺めなければならないという彼の主張は、「飲食」と「飲食行為」の文化的な構造を技術、組織、理念の面から分類して、総合的に考慮する必要がある、このため「飲食学 (food studies)」という学問領域の可能性をみる上で重要である。

本論では、著者が1999年以降に発表した「飲食」に関連する論文を3部に分けて構成されている。まず、第1部では韓国の食糧の消費について現在の視点で韓国料理のいくつかの現象学的な面について分析している。第2部では近代主義が韓国料理にどのように介入しているかについて、20世紀初頭に確立された韓国料理の消費の様相と認識について取り上げ論述している。第3部では宗教的な現象に注目し、儒教、儀礼食としての供物、朝鮮時代の食べ物などを通じて韓国の「飲食」があたかも古いものであるかのように想像される現実についてしている。

本書は今までの韓国食文化研究に対して新たな展望と研究方法を提示している。またその方法論として、韓国の様々な「飲食」の事例を通じて韓国の食生活を分析する周永河の研究は、韓国の民俗学界の中で「食」に関する研究の地平を開いているといえる。

(李 徳雨)

A5版 559頁 2011年3月刊
30,000ウォン ヒューマニスト